

優秀修士論文概要

Irgendwann muß man springen

—— イルゼ・アイヒンガーの作品における「跳躍した」語り ——

久保結菜

オーストリア出身の作家イルゼ・アイヒンガーの作品群は非現実的なストーリー、断片的に仄めかされる時間・地理的情報、次々に立ち現れては消えていく言葉と連想の交歓により特徴づけられており、しばしば読み手の理解を拒むかに見える。

ナチ支配下、アイヒンガーの祖母と叔母は強制収容所に送られてそこで命を落とした。アイヒンガーの母は半ユダヤ人である娘の養育義務があつて収容所への移送こそ免れたものの、住処を強制退去させられ、ウィーンの秘密警察本部の近くに別家族と共同生活する不自由を強いられた。このような生死を巡る実体験が、最初に発表された散文小品『第四の門』(1945)、そして最初で最後の長編小説『より大きな希望』(1948)には散りばめられている。しかし作品内で描かれるテーマは短編集『縛られた男』(1953)や『エリツァ エリツァ』(1965)を経て抽象度を高め自伝的連関を喪失していく。

これまでのアイヒンガー研究においては、作中に登場する現実離れしたモチーフや描写、そして出来事の前後関係を惑わすような語りをいかに意味あるものに解釈するかに主眼が置かれていた。しかしそうした解釈は一つに収斂せず、却って拡散するばかりだった。

例えば、ある男が目を覚ますと何者かにより縛られていたという場面から始まる短編『縛られた男』は、拘束状態を巡り繰り返される「自由と解放の物語」とされてきた。しかしここでいう自由が、一体何からの自由であり解放であるのかについては、主人公の体に巻き付けられた縄が「一体何を縛っているのか」により見解を異にする。縛を「本能」を縛るものとすれば動物と人間の差異の顕現と捉えることもでき、縄の喪失は本能の解放を意味することになる。他方で、身体的な拘束を受けることで、主人公は常人と異なる「動き」を手に入れたのだが、このことを「意識以外の行動原理の獲得」と捉えれば、縛られているが故に「自意識」から解放されるとする読みも可能となる。本修士論文は、このような「解釈の不定性」こそがアイヒンガー作品に一貫する特徴だとみる立場に立つ。

そしてこの解釈の揺らぎが初期から後期に至るまで物語内容の次元にとどまらず、語りの次元にも現れていることに注目した。作家は順序を逆転させ、出来事同士の間にある筈の経緯を欠落させて断片化させたままに物語を紡ぐのだ。「時間の流れを逆転させて」物語が紡がれる『鏡の物語』(1949)は、常識的に説明づけるならば、死にゆく主人公の「走馬灯のように蘇る過去の幻影」として読めるが、文字通り人生を誕生の瞬間まで巻き戻すと捉えれば、全てが可能性の状態にとどめられている始まりに回帰する、希望の物語とも解され得る。しかも時間の逆転は、流れに沿って理解される言語表現そのものに刃向かうものだとも言える。その限りで、戦争という生死の経験を経た世界における「新たな語り」を提示してみせたと評価され、作家の47年グループ賞獲得につながった。その一方で、同時期の長編『より大きな希望』については、自伝的・歴史的要素を交えつつも地名や年代を明示せず、子供の視点から描くという迂遠な語りの手法が、ユダヤ人迫害という出来事を描き出すにはふさわしくない「夢想的」

への耽溺と解され、『鏡の物語』において展開される先鋭的な語りに劣るものとして捉えられがちだった。しかし、この長編においても語りの焦点は固定不可能である上、絶望的な出来事を読み替えることで希望を見出す様子が描かれている点を見逃すわけにはいかない。

さらに中期の散文『私の言葉と私』においては語り手である「私」が、自身の外部に存在するものとしての「私の言葉」と旅する様子が描き出される。言葉は言葉を使う主体から分離され、自明であったはずの両者の関係が異化されるのだ。これまで、作中に繰り返し登場する指示対象不明の「私」という言葉が分析の中心に置かれるとともに、ジャック・デリダの単一言語使用をめぐる議論やエクリチュール論に依って言葉のままならなさが「言葉の他者性」として捉えられ、「自己と他者の境界」や「自己同一性」をめぐる物語として論じられてきた。そうした議論を踏まえれば、本作では、物語内容の伝達ではなく、言語芸術作品によってその構成要素たる「言葉」を問い直すことに力点が置かれていると考えられる。

ただし、これらの謎めいたモチーフと非現実的な情景、そして「わかりやすさ」に反目するような語りは、読まれることを拒むためにあるのではない。後期散文作品と「想起」を巡る研究を踏まえれば、アイヒンガーのテキストを特徴づける「理解のしがたさ」——転じて不条理性の背景には、語ることを通して意味づけることの範疇から外れたような凄まじい「生死の体験」があり、そうした体験の共有しがたさに起因する「物語性の欠如」がある。

アイヒンガーは創作実践に際し、「終わりからはじめて終わりへと向かって語ること」（『この時代に物語るということ』）、「出来事の忘却を前提とした想起」による語り、そして「沈黙において語ること」という矛盾を孕んだ、一見「不可能」な詩論をすでに初期の段階に打ち立てていた。彼女は、こうした詩論の実践を通じて読者に対して物語を了解可能にするところの条件である「時間」と「身体」や「言葉」という枠組みを問い直しているのであり、このことがまさに理解を妨げる不条理性として読者に受け取られるのではないか。本論文は、これらの矛盾を孕んだ語りの試みがどのように機能しているかを明らかにすることを目的としている。

考察するにあたって、アイヒンガーの創作期間を便宜的に三期に分け、それぞれの時期から代表作を選んで詳細な作品分析を行った。まず1948年から1952年ごろまでの初期作品からは『鏡の物語』、『より大きな希望』、『絞首台の下の演説』を、続いて1950年代半ばから1990年までの中期作品からは『縛られた男』、『私の言葉と私』、『雪』を、彼女が長い沈黙を挟んでウィーンの日刊紙に断章をするようになった後期からは『映画と災厄』と『定かでない旅』を選んだ。その上で、彼女の詩論と比較しながら、作品に現れている「不条理」の持ちうる機能を考察する形をとった。

アイヒンガーの掲げた矛盾を孕む語りの試みは、初期の散文作品においては、円環構造を持つ時間のイメージを提示し、出来事に対する時間的距離を相対化することによって、中期の『私の言葉と私』においては書き言葉と話し言葉それぞれの持つ要素の類似性により全く別の言葉を連想させ、音と文字のどちらにも還元し尽くせない語りによって実現されていた。

初期と中期の作品群をつなぐ『縛られた男』という作品にはどちらがどちらに先立つかが決定不可能な「表題と本文」が織りなす円環構造と、縛により初めて自己同定可能な特徴を獲得する「縛られた男の身体」により「部分と全体の不可分性」が刻み込まれている。また、作品の末尾では「記憶を覆い隠す雪」という表現により、アイヒンガーの作品において「沈黙」と読み替えられる「雪」と「想起」が関係づけられていることも指摘しておきたい。

そして、後期の作品については、初期から中期のテキストとの比較を通して、詩論として掲げられていた「想起」や「沈黙」による語りのプロセスそのものがテキスト化されていることが明らかになった。アイヒンガーは、時系列に従わず、絶えず外的なものをきっかけに内部へと侵襲してくる過去の出来事に対峙する「想起」と、「沈黙」とを掲げることで、負の記憶を過去のものとして位置付けようとする戦後文化への批判的立場を示していた。ここでいう「沈黙」とは——『この時代に物語るということ』や『ただ眺めること——音ひとつ立てずに ジョセフ・コンラッド』（1978）においてアイヒンガーが述べていたことを鑑みれば——物語ることの断念を意味するのではない。言葉を紡ぐ主体が言葉の主人として君臨し、言葉を介して一意のメッセージを伝える代わりに、言葉の側に意味を委ねることで、解釈の可能性を拡充することを指していると考えられる。そうすることで、歴史に代表されるような、ある特定の文脈の一部として、出来事に唯一つの意味を与え従属させることなく語ることができるのだ。同様に、初期の作品に看取できる解釈の揺曳も「出来事の局外からあてがわれる一義的な意味付け」を拒むものである。

作品分析を通じて、アイヒンガーの「不条理な語り」が、作中で「固定を阻みつつ言葉を紡ぐこと」として機能しているという結論が得られた。この固定の回避の意義として、一つにはある解釈を絶対化してしまうことの暴力性への抵抗がある。アイヒンガーは、留め難いものを留めないままに語ることで、読む度ごとに出来事を読み手に肉薄させ、過ぎ去ったものとして出来事を風化させたり矮小化させたりすることを阻もうとする。そしてもう一つには、テキストの持ちうる意味を増幅させることにより、そこで語られる出来事を読み替える余地を生み出すこと、すなわち希望を獲得する契機を創り出すことがある。共有し難い「生死の体験」を、生者である自分の立場から意味づけることなく語る術が必要だったが故に、アイヒンガーは物語性から逸脱＝跳躍し、不可能であっても沈黙したままに語るために言語から跳躍して語っている。物語を理解しようとする読者にとって不条理として働く跳躍は全て、希望の獲得に欠かせないものである。この跳躍においては、その運動性によってのみ「新しい語り」とそれによる希望の獲得が担保されるために、それらを制度化して「留まる」ことは許されない。それ故に、規範からも、跳躍によって獲得した希望からも「人はいつか皆跳躍しなくてはならない」のだ。

優秀修士論文概要

ハンザ商人書簡の言語学的研究

——フェッキンフーゼン書簡における語形と法——

壺井 大智

1. 研究対象と先行研究

本研究が対象としているのは「フェッキンフーゼン書簡 (Veckinchusen-Briefe)」と呼ばれている書簡集である。レーヴァル (現エストニア・タリン) の文書館に眠っていた書簡は、一八七九年に経済史学者の Wilhelm Stieda によって発見され、一九二一年には出版もなされている。そこに収録されているのは、リューベックの市民権を持ちながらブルツヘで活動していたハンザ商人 Hildebrand Veckinchusen をはじめとする、フェッキンフーゼン家の家族間でやり取りされた数百通にも及ぶ書簡である。書簡は、一四世紀後半から一五世紀にかけて、北海・バルト海商業圏における共通語として隆盛を誇った中世低地ドイツ語で書かれており、その使用にあたっては「ハンザの女王」と称され、政治・経済の中心地であったリューベックの方言に則した形態が規範的とされていた。ハンザ商人たちは、同言語を日常語としてのみならず、商業語としても操り、書簡をやり取りすることによって情報を収集したり、物品の売買を家族や部下に指示したりしていた。フェッキンフーゼン書簡はそのようなハンザ商人たちが残した書簡の中で最大規模のものであった。しかしながら、同書簡に基づいた研究は西洋史学・経済史学によるものが主であるため、本研究ではフェッキン

フーゼン書簡を言語学的に考察することを試みた。なお、書簡集に収められている計五四七のテキストのうち、最多の分量を数える Sivert Veckinchusen から親族に宛てられた九四通の書簡を対象としたが、場合に応じて Hildebrand や他の書簡も例示している。

使用言語の考察に際しては、まず語形に焦点を当てた。リューベックの方言が中世低地ドイツ語文章語の基盤を成していたとはいえず、他地域の人々が自らの方言に固執することは往々にしてあった。それに加え、地域によってのみならず、社会的な立場によっても使用される語形は異なり得る。フェッキンフーゼン家の出身地はヴェストファーレンだと言われているが、書簡において用いられている語形がそれに対応しているかどうかは不明であり、差出人によっても変動している可能性がある。

フェッキンフーゼン家の関連史料における言語に関しては、Peters (2006) における記述が見られるくらいだが、それによれば、Hildebrand によって書かれた商業帳簿は、リューベック方言ではなく、オランダ語やヴェストファーレン方言といった西部地域に特徴的な形態を示している。書簡についてはその存在に触れているのみであり、具体的な説明はなされていない。本研究での分析に際しては、Peters (2006) で挙げられている規範形態との比較を通じ、リューベック規範との一致度を確かめた。これに加え、Peters (2006a) で挙げられている各方言に特徴的な語形と照らし合わせ、書簡内における方言性を確認した。

次に、統語論における法に着目し、特に接続法を取り上げた。中世低地ドイツ語の接続法は、現代語よりも広い範囲で用いられており、特に副文における用法が目立っている。とはいえ、ゲルマン語内で最古の史料を残しているゴート語と比較すれば、中世低地ドイツ語の前段階にあたる古ザクセン語においても使用範囲は縮小しており、より現代語に近い中世低地ドイツ語では、さらに限られたものとなっている。しかし、接続法から直

説法へと向かう偏流はあるにせよ、中世低地ドイツ語における接続法の意識的な使用はあったはずである。あるいは、意識していなくとも、接続法の使用が当然であったために無意識的に用いられる場合もあったであろう。商人書簡とは異なるテキスト種を対象とした先行研究や、同時代における高地ドイツ語の用例とも比較しながら、フェッキンフーゼン書簡における接続法の使用状況を探った。

中世低地ドイツ語の統語論研究は、デンマーク語で書かれた *Nissen* (1881) が最初であった。この五五年後、同じくスカンディナヴィアで発表された *Magnusson* (1939) は述語動詞を対象としており、全体のおよそ半分の頁で法を取り上げている。これ以降、目立った研究は現れず、現代においても包括的な統語論研究は欠けている状況であるが、そのような中でも、個々のテキストを対象とした研究は存在している。*Schondorf* (1989) は中世低地ドイツ語訳聖書を、山口(一九九一、一九九三)は『狐ラインケ』を対象とした研究を発表しており、*Magnusson* の流れを受け継いで、法の中でも特に接続法をテーマとしている。本研究では、扱うテキストの種類は異なっているが、これらの研究を踏襲して接続法を取り上げている。考察にあたっては、主文の動詞によって引き起こされる目的語文 (Objektsatz) ¹、そして *op/up dat* によって導入される目的文 (Finalsatz, Absichssatz) における接続法に着目した。主文の動詞としては、願望を表わす動詞 (*bidden, willen, hopen, vorchten*) ²、そして主観的な推測を表わす動詞 (*dinken, menen*) を対象としており、それぞれ十分な数の例が確認された個々の動詞を取り上げている。また、副文中で見られた助動詞に関しても本動詞と同様に法に着目している。

考察に際しては、まず初めに、対象とした現象が他テキストにおいても確認されている例を示している。中世低地ドイツ語に加え、その前身である古ザクセン語や、同時代的な高地ドイツ語のテキストも挙げている。次

に、本動詞において用いられている法とその使用回数を示している。その際、直説法と接続法に加え、判別が不可能であるものを *Schondorf* (1989) に倣い、「両価的な (ambivalent) ³」例としている。その後、副文中で確認された助動詞における法とその使用回数を示している。ここでも、直説法の例、接続法の例、両価的な例の3つに分類している。最後に、助動詞も含めた全体における法の使用を割合で示し、その動詞群における傾向を見出している。

2. 本論の構成

本論は前半部分と後半部分に二分されている。前半部分(第二章〜第四章)では、フェッキンフーゼン書簡の背景についての概要を述べている。第二章では、書簡の第一発見者である *Wilhelm Stieda* がそれらを出版するに至るまでの経過を追ったのちに、書簡集でなされている原文の改変について触れている。第三章では、書簡を執筆し、そして登場人物でもあったフェッキンフーゼン家という一族を紹介している。まずは一族の出身地に関してなされている考察を挙げ、その後は主要な人物である *Hidebrand, Svett, Margarethe* ⁴、そして彼らの子どもたちを紹介している。第四章では、書簡で使用されている中世低地ドイツ語の発展に貢献した要素としてハンザ、商人、学校という三つを挙げており、それらが経験した変遷に着目して概要を述べている。後半部分(第五章〜第七章)では実際の言語使用についての分析を行なっている。まず第五章で研究対象について述べ、第六章では、規範形態と比較しつつ語形の分析を行ない、書簡で見られる語形の傾向を述べている。第七章では、中世低地ドイツ語の統語論研究史や動詞の特徴に触れたのちに、接続法が用いられるとされている文に関して、書簡における法の使用状況を提示し、その傾向を述べている。

3. 結論

語形に関しては、Peters (2000b) が Hildebrand の帳簿について述べているように西部方言の特徴と一致する部分があった一方で、規範形態に一致するものも同様に多く確認できた。書簡の書かれた時期が、中世低地ドイツ語の均一化が見られるようになってから十数年後であることから、規範形態がある程度定着していなければ逆に不自然である。反対に、Hildebrand の書簡では帳簿のように西部方言の形態が多く見られたが、この差異は彼らの置かれた状況によるものであろう。地理・言語の両方の面で故郷に近いブルッヘで過ごした Hildebrand に対して、リユーベックに暮らし、門閥に近い立ち位置にあった Sivert が文章語的な形態を多く吸収し、それが書簡においても反映されているのは当然のように思われる。書簡には直筆でないものも含まれているが、形態間の使用回数にかなり隔たりが存在していることから、Sivert の書簡における傾向をこのように述べることは可能であろう。

法に関しては、動詞全体で見ると、中世低地ドイツ語についての先行研究結果とある程度一致しており、さらに同時期の高地ドイツ語テキストとも共通する部分が多いことが分かった。願望を表わす動詞の目的語文では、両価的な例が大半であった *bidden* を除けば、全ての動詞で接続法が優勢的であった。そして、主観的な推測を表わす *mögen* の目的語文においても、接続法が優勢的に用いられていた。唯一、接続法ではなく直説法が優勢的であった *danken* の目的語文についても、その要因は不明であるが、高地ドイツ語の用例において確認されている、接続法から直説法へと向かう偏流に一致するものであった。助動詞による書き換えに関しては、*schöllen* の接続法が多用されており、直説法の使用を指摘している先行研究とは明白に異なる傾向が見られた。しかし、目的文において *mögen* が優勢的で

あったり、願望を表わす動詞の目的語文に *wollen* がよく用いられたり、先行研究との一致を示す結果も確認された。したがって、法や助動詞による書き換えについては、同時代の他テキストと一致する部分も多く、Sivert の書簡はそのような時代の潮流に沿った形で文体を保持していたと言えるだろう。

参考文献

- Magnusson, Erik Rudolf (1939) : *Syntax des Prädikatsverbuns im Mittelniederdeutschen. Von der ältesten Zeit bis zum Anfang des fünfzehnten Jahrhunderts*, Lund.
- Nissen, Carl Adolf (1884) : *Forsög til en middelnedertysk Syntax*, Kjøbenhavn.
- Peters, Robert (2000a) : *Die Diagonalisierung des Mittelniederdeutschen*, in: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*, 2. Teilband, Berlin/New York, S. 1478-1490.
- Peters, Robert (2000b) : *Die Rolle der Hanse und Labbecks in der mittelniederdeutschen Sprachgeschichte*, in: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*, 2. Teilband, Berlin/New York, S. 1496-1505.
- Schöndorf, Kurt Erich (1989) : *Über Formenbestand und syntaktische Verwendung des Konjunktivs in den Mittelniederdeutschen Bibeldrucke*, in: *Jahrbuch des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung*, Jahrgang 1989, 112, Neumünster, S. 73-91.
- 山口春樹 (一九九二) : 「中世低地ドイツ語シNTAXS 研究の試み」《Reynke de Vos》の接続法 I 式における諸問題——「アルテスリベラレス」第四八号、岩手大学人文社会科学部、一三三—一六一頁。
- 山口春樹 (一九九三) : 「中世低地ドイツ語シNTAXS 研究の試み」《Reynke

de Vos』の接続法Ⅱ式における諸問題―『ドイツ文学語学研究』学習院大学、
一二三―一三六頁。